

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ヘブライ語動詞KWNの意味について
Auther(s)	阿部, 節子
Citation	ニダバ , 10 : 18 - 23
Issue Date	1981-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046383">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046383</a>
Right	
Relation	



## ヘブライ語動詞 KWN の意味について

阿 部 節 子

ヘブライ語動詞 KWN のピエル形もヒフィル形も共に「設置する」「強固にする」「用意する」,そして稀に「導く」という意味を表わす。基本形の用例は今までのところ認められておらず、語源的には、わずかにアラビア語やエチオピア語との関連が推測できるだけである。<sup>1</sup>一方、ウガリット語動詞にも「存在する」を表わす KWN があり、その使役形が「創造する」を意味すると考えられることから、ヘブライ語における KWN のピエル形にも同じように「創造する」という意味を認めるべきであるとする意見がある。<sup>2</sup>このような考え方の根拠として、(1)これまでの研究の結果、ヘブライ語とウガリット語の間には、きわめて緊密な近親性がうかがえること、(2)したがって、ウガリット詩を特徴づけている対語法 (parallelism) がヘブライ語詩にも見られ、KWN と対語関係にある語の意味に照らして KWN の意味が明らかになるというのである。例えば、ヨブ記 31:15 には次のような型の対称構文が見られるが、和田氏によれば、KWN のピエル形の意味は、対語関係にある 'SH に対応して「造る」「創造する」である。

私を胎内で造られた ('SH) 方は、彼らをも造られた ('SH) のではないか。私達の母の胎内に造られた (KWN) 方は、ただ一人ではないか。

同様に、KWN のヒフィル形が「創造する」を意味することが次の例からわかる。

主は御力をもって地を創り ('SH), 知恵をもって世界を創り出し (KWN), 英知をもって天を張られた。  
(エレミヤ 10:12)

しかしながら、このような解釈のし方は、語意を検討する際の決め手が文型に依存しすぎていて、根本的な文法原理に根ざしていないように思われる。文の構造が対称型であれば、その中で対応する語同志は密接な関係をもっているが、はたしてそれらが同義語であると断定することができるであろうか。関係があるということは、それらが同じ意味領域にあるということであって、必ずしも完全に重なり合っているという意味ではない。対語関係にあって、一見同じような意味を表わす語同志であっても、そこには意味範囲の大小や modus 的なズレがあるかもしれない。また、近年著しく研究の成果が上っているとはいえ、ウガリット語に関してはまだまだ解らないことが多く、そうした文法や語意がまだしっかりと定まっていない言語を根拠にして結論を引き出すのは不安である。そして、何よりも重大な気掛りは、ヘブライ語における動作態に対して何ら注意が向けられていないことである。KWN の意味は、上に挙げたような単なる語意の類比によってではなく、動作態の特徴を正確に把えることによって明らかにされなけれ

ばならない。即ち、ピエル態とヒフィル態の機能そのものに基づいて、KWNにおけるこれらの派生形の意味が生じるのだと考えるべきであろう。したがって、後述するように、ピエル態とヒフィル態の機能に相違を認めるとすれば、KWNのピエル・ヒフィル両形におけるそれぞれ微妙な意味の差があるものと考えなければならないであろう。

ヘブライ語のピエル態とヒフィル態は、基本形を他動詞化する機能をもっている。それ故、伝統的な文法書の中にはそれらを共に「使役」として片付けたり、あるいは、ピエルを強調態、ヒフィルを通常の使役態として説明し分けようとするなど様々である。<sup>3</sup> ピエル形には第2子音がダブっているという顕著な特徴があるが、例えば、Gesenius-Kautzschによれば、基本形の意味が強調されて、遂には主語の動作が他にまで及んだ結果の派生形であるという。<sup>4</sup> 例えて言えば、基本形  $\text{H}^{\text{Y}}\text{H}$  (生きる) が強められて、他にも同じ動作を望む「生きさせる→生かす」という意味を表わすのがピエル形であるということであろうか。同様に、 $\text{Ṣ}^{\text{H}}\text{Q}$  (笑う)、 $\text{Ṣ}^{\text{'}}\text{L}$  (願う)、 $\text{HLK}$  (歩く)、 $\text{HṢ}^{\text{V}}\text{B}$  (考える) 等の動詞は、ピエル形では、それぞれ「ふざける」「懇願する」「歩きまわる」「瞑想する」となって、基本形の表わす動作が繰り返されたり、念入りになることを意味する。また、ピエル形には名詞に由来すると思われる denominative の意味がある。例えば、 $\text{dābār}$  (言葉) →  $\text{dibbēr}$  (話す)、 $\text{'āpār}$  (ちり) →  $\text{'ippēr}$  (ちりを払う) のような場合であるが、このような動詞も Gesenius-Kautzsch の説明にしたがえば、名詞の表わす意味が強められた結果、動詞の意味が生じたということになる。

このような解釈は、しかしながら、象徴的ではあってもあまりにロマンチックに過ぎて、客観的な裏づけに乏しい。英語における “forgotten” は、“forgot” よりも強調的で「忘れる」という意味合いが濃いいといえるであろうか。このように、ピエル形を強調態をする見方は、アラビア語をセム系言語の原点と考え、全てのセム系言語の特徴をこの言語を規範として説明づけようとする方法論のあり方に起因する。初期の研究において、アラビア語はセム系言語の中でもっとも古く、セム素語に近似するものと考えられていた。その結果、アラビア語動詞の Form II、即ち、第2子音が重複する動詞の派生形とヘブライ語動詞のピエル形を対応させて、後者を強調態として定義づけたものと思われる。

これに対して、近年アッカド語動詞の特徴からピエル態の機能を解明しようとする試みがあり、<sup>5</sup> かなり説得力をもっているように見える。それによると、アッカド語動詞における B(G)-Stem と D-Stem の対応関係に着目して、ヘブライ語動詞のピエル態の本質を「強調」ではなく、「状態」に見ようとする。即ち、B(G)-Stem Stative は英語の predicate adjective のように、主語の属性を表わしたり、あるいは、動作が完了してその結果が持続している状態を表わす。これに対して、D-Stem はこのような「状態」の意味をもった他動詞である。そこで、アッカド語 D-Stem 動詞のこのような特徴をヘブライ語動詞にも見ることはできないかというのが Jenni 等の着眼点である。ヘブライ語動詞には、ピエル形とヒフィル形のいずれか一方だけしかないものと、KWN のように、両形を備えていて、しかも双方が同じ意味を表わすものがあるが、後者の場合、基本形が自動詞であるものが圧倒的に多い。その上、このような場合、ピエルとヒフィル形のどちらにもかたよらず、同じように頻繁に用いられていることがわかる。したがっ

て、そこから推測できることは、ピエル形とヒフィル形の意味は、辞書の上でこそ同じかもしれないが、実際には何らかの違い、それも、うまく訳語にあてはまらないような微妙な差が存在するのではないかということである。そのような微細な意味のズレは、意義素にまで堀り下げなければ正確に把握し得ないような性質のものであろう。そこで考えられることは、ピエル形とアッカド語 D-Stem 動詞との対応関係である。即ち、D-Stem 動詞が「アクション」に対して「状態」を表わすように、ピエル態は特に「状態」に力点を置いた表現のし方である。それは、動作が完了してその結果が持続している状態を「実現」として表現する。あるいはまた、動作の結果がその動作を受ける側、即ち、動詞の目的の属性であるかのように見える程「状態化」して表現するといえよう。これに対して、ヒフィル形は動作を誘発や過程として表現する。それ故、表現のし方が、前者では形容詞的であり、後者では動詞的である。また、関根正雄氏は、ヒフィル形は「行動なり過程なりを出発点とする起因態であり、ピエル形は状態を出発点として、その実現を表わすもの」と見做して、H<sub>1</sub>YH（生きる）のヒフィル形は「生かす」、ピエル形は「生き生きとさせる」というふうに、それぞれの意味特徴に基づいて訳し分けなければならないことを指摘しておられる。<sup>6</sup>例えば、Ⅱ列王記 11:1、ヨブ記 12:23、エレミヤ 15:17に見られる 'BD のピエル形は、いずれも「滅ぼす」という動作の結果が目的の側において「滅び、なくなってしまう」状態になることを表わす。換言すれば、'BD のヒフィル形が「滅ぼす」という出来事を表現するのに対して、ピエル形はその出来事が完結して、その結果、滅ぼされたものの存在が消滅してしまった状態に力点を置いた言い方である。

さて、以上のような考察を踏まえて、動詞 KWN のピエル形とヒフィル形の意味を検討し直してみたい。意味を検討するには、前述したように、動作態の特徴そのものに着目して行われるべきであって、和田氏が提案しておられるような構文の型や lexical な特徴だけを根拠にしてはならないと思う。確かに、文脈によっては、KWN のピエル形もヒフィル形も共に「創造する」という意味である。しかし、そこには依然として「状態」か「動作」かの区別が曖昧なままに残されており、modus 的な差までも明確に区別して訳し分けるという問題の解決にはならないであろう。

#### A. KWN のピエル形：

- (1) 申命 32:6      主はあなたを造った (QNH) 父ではないか。主はあなたを造り上げ ('SH), あなたを堅く立てる (KWN) のではないか。
- (2) 詩 24:2      まことに主は海に地の基を据え (YSD), また、もろもろの川の上にそれを築き上げられた (KWN)。
- (3) 99:4      あなたは公正を堅く立てられた (KWN)。あなたはヤコブの中で裁きと正義を行われた ('SH)。
- (4) 119:73      あなたの御手が私を造り ('SH), 私を堅く立てた (KWN)。
- (5) イザヤ 45:18      天を創造した (BR') 方、即ち神、地を形造り (YSR), これを仕上げた ('SH) 方、即ちこれを堅く立てられた (KWN) 方、これを形のないものに創造せず (BR'), 人のすみかにこれを形造られた (YSR) 方。

これらの例において、明らかにKWNと対語関係にあるのは、QNH, ‘SH, YSD, BR’, YSRであるが、これらの動詞の意味は互に共通する範囲を含み似通ってはいるが、そこには微妙なニュアンスの違いがある。例えば、(1)では、QNH, ‘SH, KWNが対比の妙を発揮していて、表現の効果を上げている。即ち、QNHは「造り出す、生み出す」という事実を、‘SHは生み出すために行う「作る」という実際の行為を、そしてKWNのピエル形は、そうして作り上げたものをしっかりと設置してその存在を確立することを表わしている。いわば、創造の過程が段階を追って発展的に述べられているのであって、ここからKWNが‘SHやQNHと全く同じ意味を表わすという根拠は成り立ち難い。同様のことが(2), (3)についても言える。(2)では、「海の上」と「川の上」と、場所を変えて同じ行為が行われることを示しているの、この場合のKWNはYSDと同じ意味に解すべきである。KWNだけを「創造する」とするのは、YSDとの対語関係を考えるとかえって不適當であろう。(3)における‘SHの意味は、「作る」ではなく「する」であって、KWNとの同義対語とはならない。‘SHは裁きや正しい行為が行われることを表わし、KWNはそうした具体的イベントを通して公正な社会が確立することを述べており、それ故、そのような社会の状態を表わしていると解釈することができよう。(4)は(1)と同様に、動作を表わす‘SHと状態を示すKWNのピエル形が対比的に用いられている例であり、このような対比は、(5)においていっそう明らかに認められる。即ち、BR’は「即ち神」とあるように、文字通り「創造する」という意味であり、旧約聖書では通常神についてのみ用いる動詞である。YSRは神が「土で人間を形造り…命の息を吹込まれた」（創世2:7）こと、また、偶像を造る者が「炭火の上で細工し、金槌でこれを形造る」（イザヤ44:12）ことを表わす時に用いられている動詞であって、「土で」、「金槌で」等のキーワードから「形をつくる」という動作を表わしていることは間違いない。したがって、YSRは、‘SHやBR’よりも一段と具体的な意味での「つくる」を表わしていると考えられる。このようなバラエティーに富んだ動詞表現の中で、KWNは、こうして作り出したものを確立すること、つまり、しっかりと安定した状態に置くことを表現していると解釈できよう。

#### B. KWNのヒフィル形：

- (1) IIサムエル 5:12    ダビデは、主が彼をイスラエルの王として堅く立て（KWN）、ご自分の民イスラエルのために彼の王国を盛んにされたのを知った。
- (2) I列王 2:24        私を父ダビデの王座に着かせ、私を堅く立て（KWN）、御約束通りに王朝を建てて下さった主は生きておられる。
- (3) ヨブ 15:35        彼らは害毒をはらみ、悪意を生み、その腹は欺きを宿す（KWN）。
- (4) 詩 65:9            あなたはこうして地を準備し（KWN）、彼らの穀物を作って下さる（KWN）。
- (5) 箴言 8:27          神が天を据え（KWN）、深淵の面に円を描かれた時……。

上の例からKWNのヒフィル形の意味特徴を調べてみると、訳語の上では「堅く立てる」「据える」であり、ピエル形の意味と差がないかのような印象を受ける。しかし、これはピエル形とヒフィル形の意味のズレをはっきりと示すような適切な訳語を見つけ難いためであって、実際には、目的語の状態を表わすピエ

ル形に対して、主語の動作のプロセスやイベントを言うヒフィル形の意味特徴を読み取ることができる。例えば、(1)と(2)のKWNは「ダビデの統治を支え、安定させる」神の行為が前面に出た表現のし方であるから、目的語は、その行為を受ける側として消極的に扱えられ、したがって、「…させる」という使役の意味が強まる。(3)～(5)の例についても同様の解釈をして差し支えないと思われる。特に(5)の場合、KWNが状態よりも動作を表わしていることは文脈からも明白であろう。神が天を据える行為は、深淵の面に円が描かれた「時」によって限定されているので、定着した状態であってはならず、また、主が世界を置かれることは、「御力をもって…知恵をもって…英知をもって…」という副詞句によって説明されているので、動作を示すものと解すべきである。

以上、KWNのピエル形とヒフィル形の意味の相違について簡単に述べてみた。まとまりのある試論というにはあまりに不十分であるが、聖書の翻訳の問題が単語の意味をただ lexical に検討するだけでは足りないという日頃の感慨を表わしたかったつもりである。原典によい訳語を当てようとすることは、確かに大切なことではある。しかしながら、翻訳の課題が単に個々の単語に適わしい訳語を検討することだけに終始してしまってはならないであろう。一つの単語が表わす意味は、文法機能はもとより、文中の他の構成要素との関わり、語意よりもさらに深いところで扱えられなければならない意義素、あるいはまた、概念を規定している文化的背景等、様々な因子の所産である。それ故、KWNのピエル形とヒフィル形がどのような意味を表わすかという問題は、「設置する」と訳す方がよいか、それとも、和田氏の言われるように、「創造する」と訳すべきかといった単なる訳語上の問題ではなく、ヘブライ語動詞の動作態の機能そのものにまでさかのぼって考えるべき問題であると思うのである。訳語の問題は、このような問題が明らかにされることによって始めて、そして、自ずから解決するものであらうと思われる。

## 註

- 1 Brown-Driver-Briggs, 1968, pp. 465-67。
- 2 詳細は和田幹男, pp 49-61 を参照。
- 3 Gesenius-Kautzsch-Cowley, A. B. Davidson, J. Weingreen 等。
- 4 pp. 141-43 を参照。
- 5 E. Jenni, A. Goetze 参照。
- 6 「関根正雄著作集」第7巻, p. 432 参照。

## 参 考 文 献

- Brown-Driver-Briggs, Hebrew and English Lexicon of the Old Testament, 1968.
- Classen, W. T., "On a Recent Proposal as to a Distinction between Pi'el and Hiph'il," Journal of North-West Semitic Languages, 1(1971), pp. 3-10.
- , "The Declarative-Estimative Hiph'il," Journal of North-West Semitic

Languages, 2(1972), pp. 5-16.

Davidson, A. B., An Introductory Hebrew Grammar, 1966.

Gesenius-Kautzsch-Cowley, Hebrew Grammar, 1910.

Goetze, A., "The So-Called Intensive of the Semitic Languages," Journal of American Oriental Society, 62(1942), pp. 1-8.

Hillers, D. R., "Declarative Verbs in Biblical Hebrew," Journal of Biblical Literature, 86(1967), pp. 320-24.

Jenni, E., Das Hebräische Pi'el, 1968.

Lambdin, T. O., Introduction to Biblical Hebrew, 1976.

「関根正雄著作集」第7巻, 1980.

和田幹男, "聖書ヘブル語のKWNについての一考察," 「英知大学紀要」1974, pp. 49-61.

Weingreen, J., A Practical Grammar for Classical Hebrew, 1959.